

2A-87

514

172
5
305

一
四
三

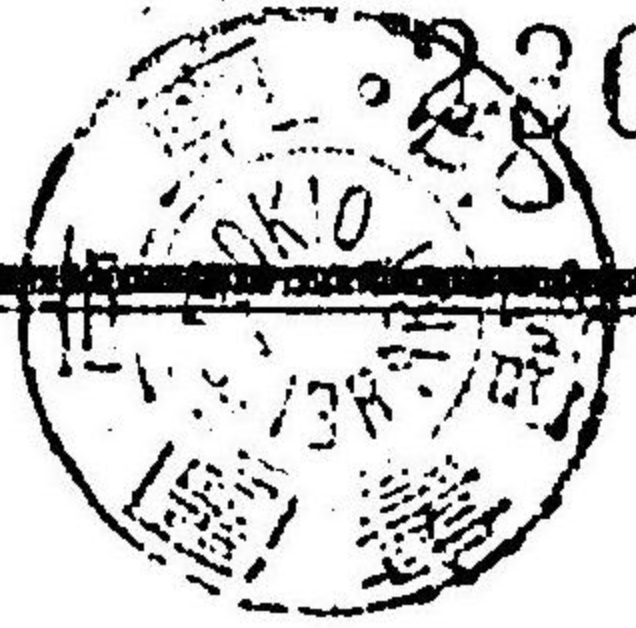
獨逸新作

小兒演劇

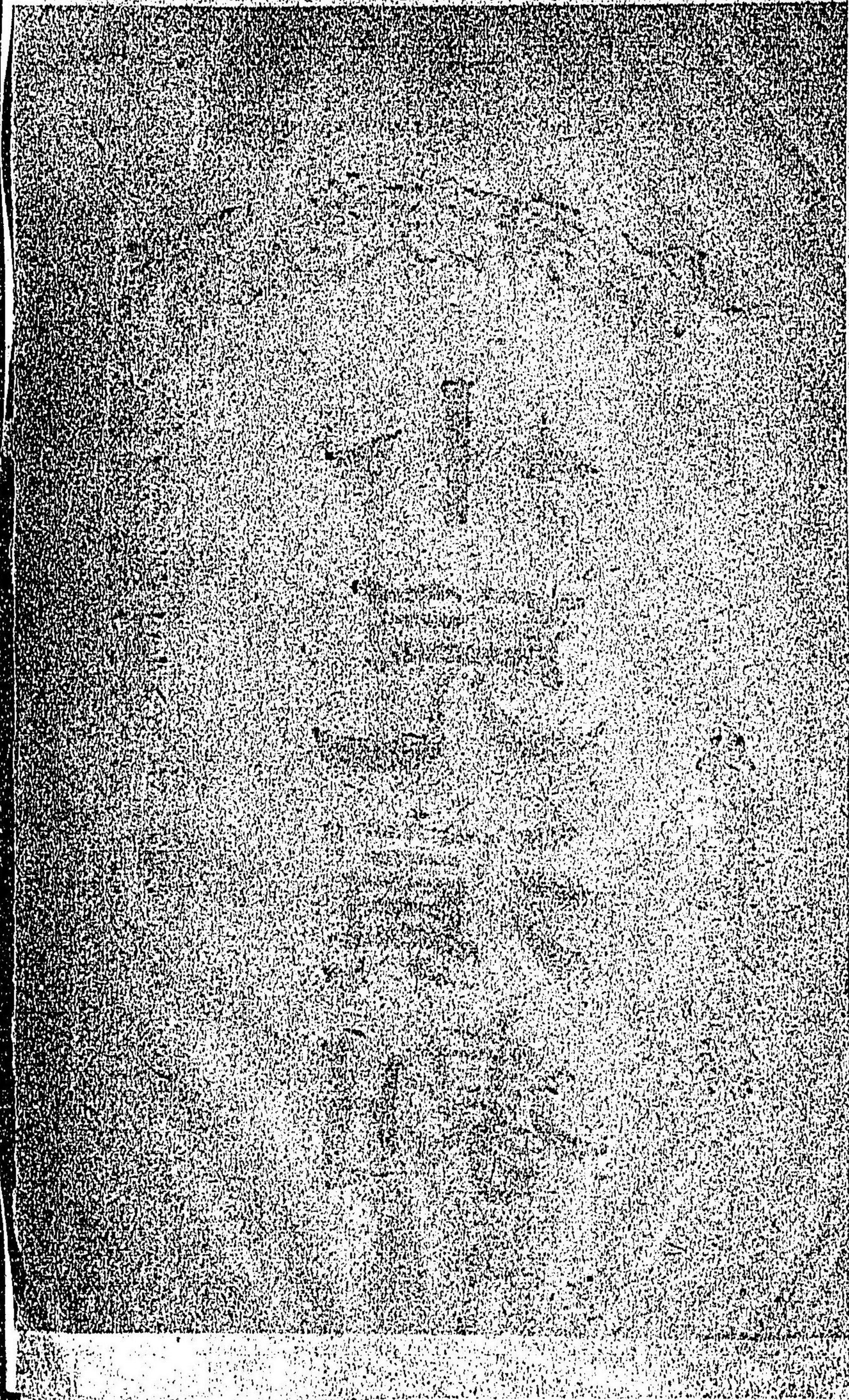
鶴岡義五郎編輯

外題正月の餅

特52

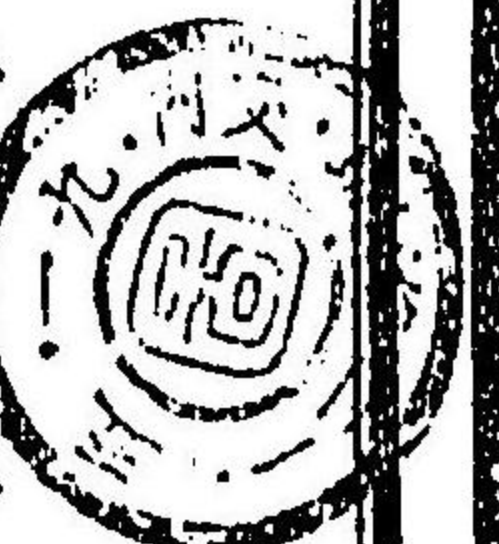


No. 10140



序

兒女の教育の強ち學校のみ依るべきはあらずそのいとけなきは
との殊に家庭の訓う切要なるべきその訓との朝なゆふなの言行よ
就きてこれを提撕しこれを誘掖すべきに更よもいはす其の遊戯の
種類に至りてももはら善を勧め惡を懲すに足るべきものを選びて
まらずく天然の良心を養ふべきことなりかしこの頃松野礪君獨
逸の兒女讀本の中よ就きて一小演劇脚本を翻譯して余よ示さる觀
もてゆくにその趣向簡單よして字句もいと平易なれに幼童も容易
よよみ得てそのころをささるも難かるまじくこそされに親戚朋



友などのまとぬの折々の戯は兒女等をして演せしむるおも亦やすかりぬへしおれやかて闇々中よ良心を養ふの具よして兒女の爲は慮れる用意頗周到なりといひつへし其の風教よ益ある豈わか言を待たんやこの冊子かへすとて聊言くはへつ

西涯主人

小兒の演劇

外題正月餅

○初幕

質素なる一ト間のうちよ利世の人形を机の上よすのらとて遊て居る處へ嘉太郎入り來り、嘉太郎「今日の利世その方へ、ふり向ながら、リセ「今日の、嘉アポーカ、能くおいでマテ、サー一ツ所よお庭へ出て遊ばふ、たまへわたと、かくれんぼうをするのだよ、嘉太郎「かなしき顔をこながら、手をもつて眼をこすり、涙を拭ひ無言て居る、リセ「おまへ、おかしな顔をおしたがる、さふかおとしか、おまへ知

て居るたらう、もし今日泣と明日お正月のおかちんが、
貰れないとい、嘉太郎「誰からかへ、わたしもいつか後見の
伯父さんから、一ツもらつたことがあつたが、もう死で
まつたし、おバアさんの貧乏たし、トおやくりを上ケ、両
手を顔にあでる、利世氣の毒そうよ、嘉太郎の前よす、
み、リセ「オイ嘉アポーおたまりよ、お泣でないよ、お天道様
が入らツおやるから、また助てくれる人もあるたらう、
泣ていおやめよ、嘉アポー明日子、早くわたしの所へおあ
で、一ツおかちんを上るから、しかも大きいのを、私の所よ
い、たんとあるから、おまへ明日のきつと早くおいでよ、嘉

太郎合點首をする、嘉太郎「利世ちゃん、おまへのほんとう
は善いお子だよ、わたしも何かおまへは悦ぶとが、こて
上たいけれども、リセ「うりやアおまへ、もう、したゞの子、昨
日それ、アノわたしの學校のおしどを、手傳てくれたじ
やアないか、嘉太郎「あんなとなら、いくらでもして上ケる
から、おふぞまた、たんとさしておくれよ、ほんとうはお
まへの私をか、いがつておくれたから、リセ「アノそして、
おまへのおバアさんの、おふしてお出だへ、嘉太郎かな
しく、嘉太郎「ア、可憐そうよ、年のよつたおバアさん、近頃ハ
大へん弱て居るへよ、またたんとおしどを、しなけれハ

ならず、昨日もわたしども、大かた一日なんよも、たべ
る物がなかつた、私のかまひないけれど、かひゆるう
なのおバアさん、いくらおしどをしても、まうかるもの
の少なく、ア、親父が生て居る内、よかつた、おバアさ
んの大きい坐ぶとんのうへ、すいつて氣樂よして居
るとが、できたけれども、親父とおッかアが死でから誰
も、たべさせてくれるものがなくなつた、オ、利世ちやん
よ、こんなと、わかるまいが、トまた泣いたす、利世も
とも、泣ながら、「安心おしよ嘉アポー、いつまでもろ
んなよ難儀なと、ばかりが、つゞきもしまいから、そして

お天道様がきつとおバアさんを見捨のなさらないよ、
あんちよ、信心をおしたものを、明日の子おバアさんよ
も、大きいのを一ツ上ケるから、おまへきつと、とりよお
いでたらう子、嘉太郎「アイ、ト、二タ足三足、戸口の方へ行き、
又ふりかへりて、嘉太郎「利世ちやん、どふかわたしよ筆を
一本、貸しておくれでないか、リセ「ア、い、と、何で
もおまへの入るもの、貸して上ケるよ、ト筆箱を持來
り、筆を一本取り出して、リセ「そら、これのおまへよあげ
るから、かへさなくてもいよ、嘉太郎「有がたう利世ちや
ん、わたしのもう歸ります、また學校のおしどがあるか



るよ、可憐ううな嘉アポー、ト再び涙を拭ふ。リセ「うれに明日お正月でも、おかちんをたべるとも、できないとさ、氣の毒トやアありませんか、後見の伯父さんの死んだら、おバアさんの貧乏たも、ト何か願ひのある顔付まで、女教師の顔を、ちよいと見ながら、リセ「アノッかさん、うちよのおかちんがたんとあるから、あれを少しばかり嘉アポーよもやつて、ようございませうか、女教師の娘を抱さしめ、娘の顔よ我顔を、おアあて眼をまばたき、女教「オーほんよおまへの可愛い娘だよ、うりやアおまへの好きよおと、リセ「誠よ有がたうおッかさん、嘉アポーが

こんなよ、悦ぶたらう、早く明日來れい、女教「それで、おまへ、明日といふよりやア、今夜の内よ、あのおかちんを、大きい重箱へ入て、持て行てやつたらよからう、リセ「おかち、あれを私で、自分で持て行くのも、きまりがあるいから、どふか女中の花に、持してやりたうございませう、おバアさん、丁度今日の大晦日だから、今夜の十二時ごろ、一チバン今年中の、おしまひの時よ、持てやつたら、どふでございませう、女教「うれで、そふおと、暫時ありて、リセ「アノッかさん、うれでもアノおかちんばかりで、おバアさんよたべられな、いけな、い

ら何かまだ外よ、おバアさんの助よなるもの、ありますまいか、女教師少と驚と顔付まで、女教「外よといふて、おまへ何をやるつもりだへ、」リセ「ア、もー、このををおッかさんがお許たとい、けれども、子ーおッかさん……あなたも知て入らとやるたろう、アノー私の巾着よ、父上やおッかさんから、時くご褒美よ、下ダさつたお金が、もう三圓ばかり、ございませう、」女教「アム、うしておまへの、あれをおバアさんよやるつもりか、」リセ「ハイ、もーおッかさんが、い、とおッしやれば、」女教師少と考ながら、女教「ア、あの巾着をこへ持ておいで、利世の出て行き直よ、」

巾着を持って入り来り、リセ「丁度、三圓五拾錢程ございます、」女教「利リボーヤ、よく聞よ、おまへがごふか、おバアさんを助けてやりたいヨと、おもふの善ひこゝろさした、が、父上も子、私もそんな金持でない、ごふかかふか、今日くらとておる中だから、人よやるお金なすがないが、これのおまへのもので、おまへがおバアさんよ、やらうとおもふなら、やつてもい、が、おまへのこれで余所行の着物を買といふたじやアないか、」リセ「オーおッかさん、またわたしの古いのが、結構でございますよ、」女教「それでおまへの思ふやうにおし、私に何よもい、ない、」

から「ト出て行く利世ハ一人リ學校ヲ持て行く書物
 をとて居ながら、まやく「獨言よ、」と「きつと大悦たら
 う」この所へ朋友の留利といふ娘入り來り、る「今日ハ
 利せちやん、利世立上りて迎ながら、」今日ハ留利ち
 やん、「る」おまへ又勉強かへ、「リ」何少オ、「バ」がけ、「る」
 どのまだ學校のおとどが出來ないよ、「リ」オヤッ、「マ
 ア」こツちへおいで私が少し手づたつて上ケやう、留利
 の利世の側ますのる、二人りとも學校の仕事をとて
 居るうち、利世俄に嬉うな聲よて、「リ」留利ちやん、ア
 ノ予此度のお正月ハ私の爲めよ、「ハ」ん樂みなお正月

だよ、「ト此時幕をおろす、

○二々幕目

この貧しき住居の二ト間よて、縁のやぶれた 二三
 枚敷て、中央よ古き角火鉢よ消炭をおこも、土瓶をかけ、
 湯をわかし、うのかたのらよ、甘薯二三本ばかり、灰の中
 へ焼かけてある、土瓶の湯ハ、ナン、と、今湯氣を吹出
 はじめ、行燈ハ、一本燈心よて、ぼんやりと、僅に火鉢の周
 圍を照とてほのぐらよ、そこよ老婆と嘉太郎の兩人、火
 鉢を中よ向ひ合て、すはつて居る、時よ遠寺の鐘、ポー、
 と十一時四十五分の時を告來る、老婆「アレもう、今十五分



十七



十六

ばかりで、今年もおままひよなるが、嘉アポーや、この舊
 年と、新年のわかれめが人間のいちばん、大じの時た
 いふが、まア、おまへも、私も今日までの、どうかこふ
 か、何事もなく、くらしたが、又來年よなれば、どんなどが、
 あるやら、人の身のうへといふもの、さつぱりわから
 ないものた、今日まで有がたく、無事よ涉つた、みんな、
 お天道様のおかげだ、ドレお禮を申上やう、「ト二タ人の
 両手を合して、頭を下げ、暫時おがみ、老婆の漸く頭を
 上げ、かたへらある茶碗へ湯をつぎ、丁度いま焼た、さ
 つまいもを一つ手よもつて、灰を吹落す、このとき、戸口

を、ホト、と、切き、「ごめんなさい、トいふ聲聞ゆ 老婆「ハ
 イさなたですか、マアおのいりなさい、トいふ聲よつ
 れて入り来る、女教師のところの下女花なり、大きな
 風品敷包を提て、花「へい今ばん、私のところの利世ち
 やんからも、おかみさんからも、よろしく申してくれいと
 おっしゃいました、そしてこれ、アノ利世ちゃんから
 嘉アポーへお約束、くのおかちゃんじや、そうです、ト風ろ
 一き包を、二タ人のまへよをく、老婆の嬉し涙よ聲くも
 らせ、老婆「オヤマア、ほんよお慈悲深いお方じやア、ない
 か、コレ嘉アポーを、あの大きいお包を、嘉太郎包を、

手ようけとりなから、嘉太郎「オヤ大へんおもひとほんとう
 うゝ利世ちゃんの善いひ人だね、こんなよどつさり、老婆
 おまへさん、おかへりなさつたら、おかみさんも利世
 ちゃんにも、ヨーク、お禮をおッまやつて下ダさい
 ませ、いづれ嘉太郎が明朝早く御禮ごまア参まりませけれ
 ども、嘉太郎「うゝて私からも、利世ちゃんもヨークお禮を
 申たとおつまやつて、くださいよ、下女花「ハイさやうなら
 よろしいお年ごへを、ト下女の出て行く、嘉太郎行燈を
 さげて戸口まで送つていで、再たびかへりがけも又また嬉うれうう
 ちろりと包を見る、老婆「私のマア、どんなも嬉うれしいか

あらん、今夜のおまへが、もうお芋を、くはないでもたんと、
 たべるものがあるから、嘉太郎「ア、おバアさん、このお
 かちんの私のじやアない、おはアさんのだよ、わたしの
 また若わて、丈夫だから、お芋をたべれば、たくさんだよ、老
婆「ほんもおまへの孝行ものだよ、あんなもたくさんあ
 るから、二人でたべるほど、十分あるだらう、下風呂敷
 包を開かんとて、これを抱かへながら、老婆「オヤ、ほんにこ
 れの大そう重い、下結めを解きて、重箱のふたを開きて、老婆
道理で重いはづた、ギツシリ一杯つめてある、ドレ出し
 て見やう、下上もならべたる、おかちんをとりいたし、老

全 明治廿一年五月七日印刷
年五月十四日御版

(定價金五錢)

編輯兼
發行者

東京府平民

鶴岡義五郎

東京麴町區飯田町
四丁目三十六番地

印刷者

北澤久次郎

東京京橋區和泉町
一番地

賣捌所

東京京橋區和泉町壹番地

北澤久次郎

其他各書林繪草紙店

大日本圖書會館

一

四

一

冊

三

號

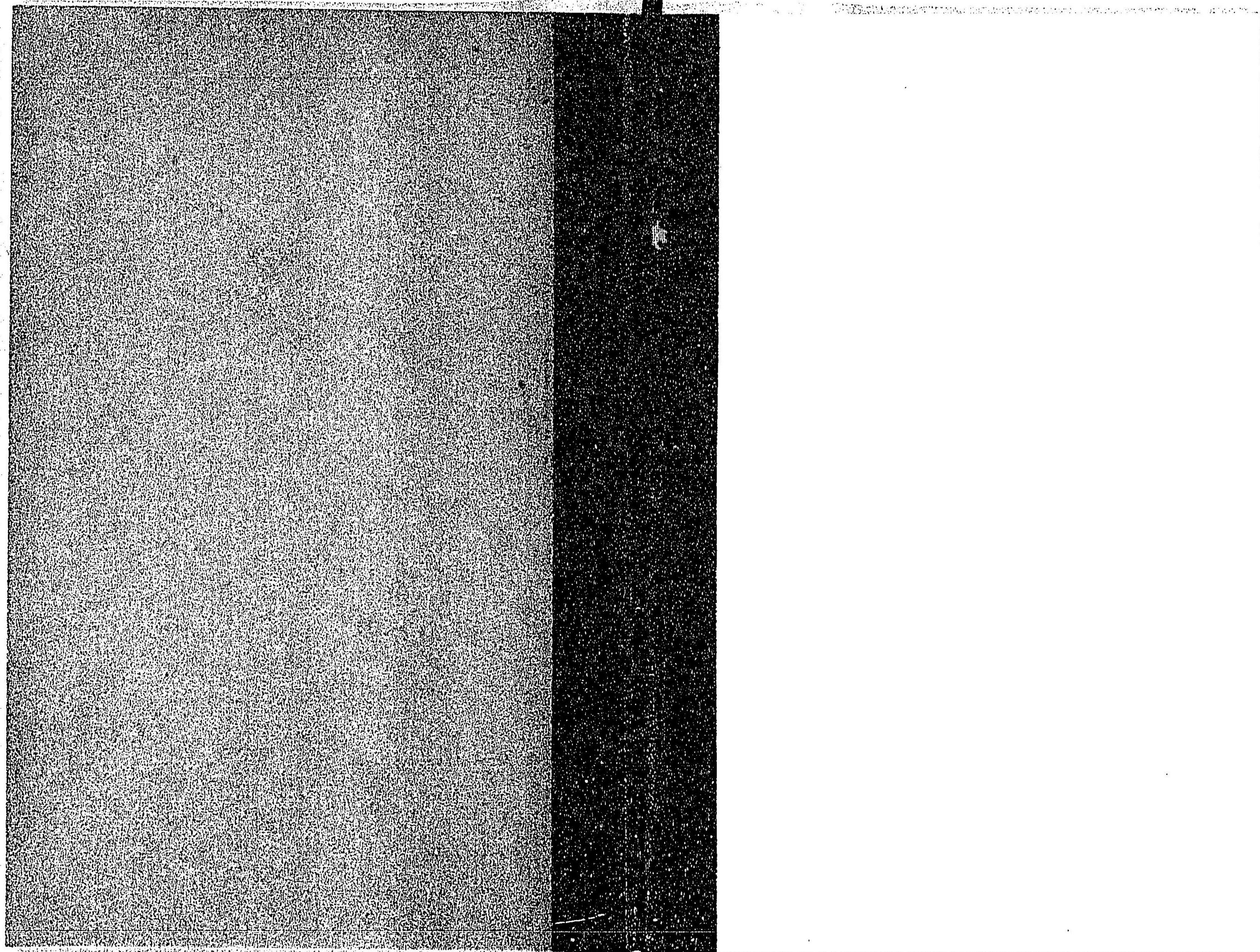
三

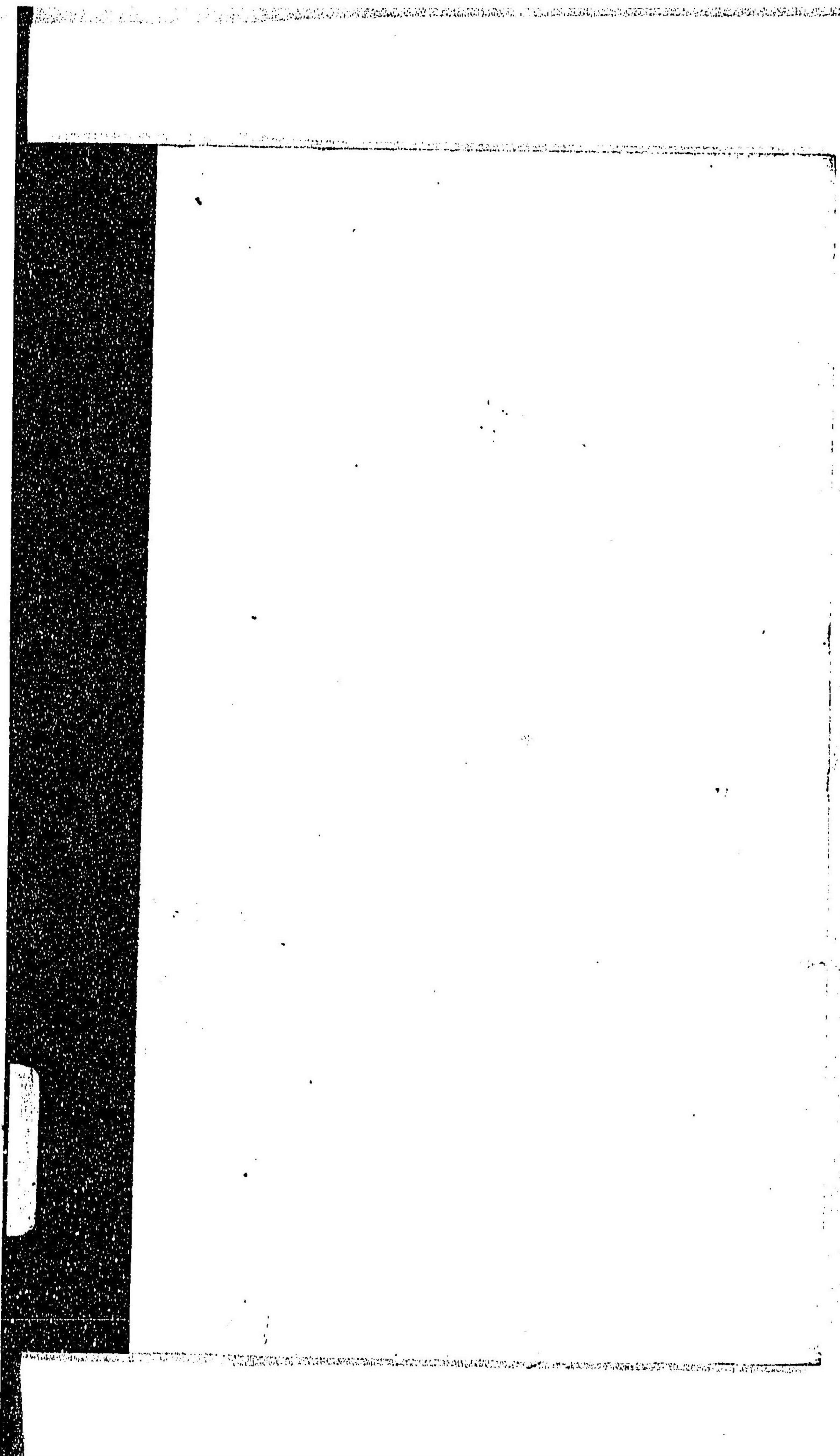
架

一

七

函





獨逸
新作 小兒演劇

鶴岡義五郎

国立国会図書館

074820-000-3

特52-230

小兒の演劇

鶴岡 義五郎 / 編

M21

CEK-0157



